

2. 太郎右衛門自然再生地周辺の状況

太郎右衛門自然再生地周辺は荒川上流河川事務所の直轄区間となっており、その区間は荒川本川では笹目橋の位置する 28.8km 地点から 84.4km 地点まで、及び 86.2km 地点から 89.8km 地点までとなる。

支川では、入間川が合流点から 16.0km 地点まで、越辺川が 17.4km 地点まで、都幾川が 5.3km 地点まで、高麗川が 6.6km 地点まで、及び小畦川が 6.4km 地点までとなっている。

本川

- 河川内の横断工作物としては、上流から農水省管轄の六堰、明戸サイフォン及び秋ヶ瀬堰がある。六堰は、平成 11 年の出水により崩壊したが、緩傾斜魚道などの機能を追加し、平成 15 年 5 月に改修を完了している。
- 上流部の瀬と淵が続く扇状河川部は、砂礫の河原が発達している。
- それよりも下流側では勾配が 1/910 ~ 1/3,400 と緩やかな低地河川であり、本来は蛇行した河川である。現在、低水路は低く直線状になっているが、旧河道は現在も堤外地に残っている。
- 秋ヶ瀬湛水部から堰下流の感潮域は、勾配が 1/7,260 とほとんど平らな状態で流下していく。
- 秋ヶ瀬堰下流では、下水処理水の合流により BOD は高く、武蔵水路合流前の大芦橋上流では、濁水時に瀬切れ等が起きている。
- 河川の利用状況としては、30km ~ 50km 地点では左岸側にゴルフ場、グラウンドが多く、50km ~ 70km 地点までは耕作地が多い。全体では耕作地が 32% と多く、次いで草木群落、ゴルフ場・グラウンドの順となっている。

支川

a) 入間川

- 直轄区間には 4 つの堰がある。
- 合流部から 6km 地点までは、秋ヶ瀬堰の影響で湛水化し、それより上流では砂礫の河原が発達している。
- 河道は度重なる洪水のため河川改修が進み、上流部は直線化している。
- 水質は近年、改善されているが、流況は、濁水時に上流部で農業用水等に取水するため、瀬切れになることがある。
- 土地の利用状況としては、合流地点近くの左岸側ではグラウンドの利用面積が多いが、全体として荒川同様、耕作地が多い。

b) 越辺川

- 直轄区域には堰が 5 つあり、高麗川、都幾川等の河川の合流が多い。
- 台地から低地を流れ、本川合流点まで瀬と淵が続く。
- 合流点部分での洪水の発生が多く記録されており、他の支川と同様に河川改修により直線化が行われている。
- 人為的利用は少なく、自然が多く残されている。

c) 小畦川、都幾川、高麗川

- 直轄区間はそれぞれ 6km ほどで、比較的急峻な河川である。
- いずれの河川も同様に直線化の改修が行われている。
- 堤外地が狭いこともあって、土地利用はほとんど 80% 以上が草本及び木本群落が占める。

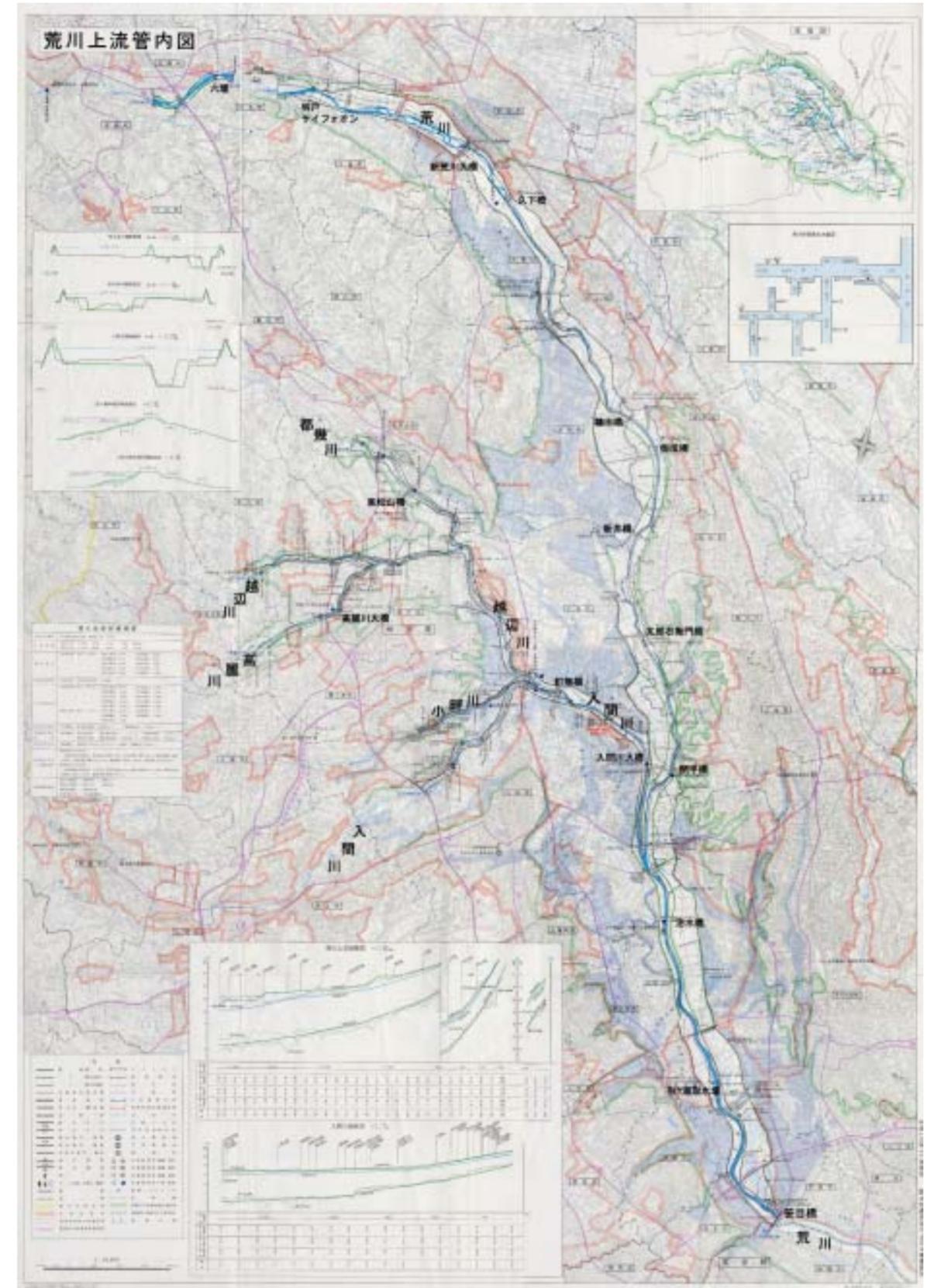


図-2.1 荒川上流管内図